

漁業経済学会 短 信

漁業経済学会第33回 雑 感

長谷川 健 治（三重大学）

漁業経済学会の一般報告は例年通り、多彩なテーマで報告者各人の特色ある報告がなされたように思う。私自身も一般報告に参加させていただき、貴重な御意見を頂戴した。当初、一般報告に対する感想を書く予定であったが私自身も報告者の一人であったため、全体的な一般報告のそれぞれについて考える余裕を持たなかったというのが偽らざる心境である。そこで少し弁解じみたことになるが今年度の大会シンポジウムの共通テーマ「200海里体制下の漁業再

編」ということに関して私自身、とくに「漁業再編」という点に関して考えていることを二つだけ述べさせていただくことにする。

「200海里体制」という呼称が使われてから久しい年月が過ぎた。そしてその体制下で日本漁業の構造上の再編成が進行しつつあるのが現段階であろう。とくに中小資本漁業はこのような構造再編がイカ、日本海マスなどの漁獲不振、近海・遠洋カツオをはじめ、多くの漁種部門の経営不振と減船による整理などの危機をはらみつつ進行している。中小資本漁業は労働力の供給の点でも水産物の水揚げの点でも沿岸漁村地域に根強い存立基盤をもっており、地域漁業との密接な関係にある。したがってその問題はたんなる個別経営の危機という枠を越えて沿岸漁業を含めた地域漁業全体の構造問題へと波及する。例えば沖合から沿岸へのUターンによる沿岸海域での過剰操業問題、漁業労働者の失業問題、産地市場の経営基盤の悪化等の諸問題があげられよう。

このような「漁業危機」を通じた構造再編は現在の地域漁業のあり様を大きく変化させつつ全国的規模において進行していると思われるのである。したがってこうした構造再編の実相の把握はすぐれて地域分析として行われる必然性

目 次

漁業経済学会第33回大会雑感

長谷川健治 … 1

事務局報告

第33回大会報告 …………… 3

総会議事（抄録）…………… 3

在京理事会報告（7月22日）………… 4

学会誌の編集・発行 …………… 5

第34回大会の開催地 …………… 5

寄贈文献の紹介 …………… 2

告知板

国際漁業研究会第2回大会報告 …… 5

を持つのである。無論、無媒介的な個別地域ではなく、漁業種類別の縦断的アプローチとの統一的手法で分析される必要があることは言うまでもない。

200海里時点ではさまざまな実態調査と報告が行われたが、そうした枠組の定着化と日本漁業の構造再編が進行しつつある現在、以前にも増してその必要性を痛感するものである。

二つめは以上のことと関連して分析視角の問題である。高度成長期の日本漁業は旺盛な設備投資、労賃の上昇、労働不足といった経営内的なコストブッシュ要因を①魚価の持続的上昇、②制度金融、系統金融による潤沢な漁船建造資金等の供給、③エレクトロニクス・省力化技術の漁船設備への導入に見られる労働力不足に対応する労働生産性の向上などの諸条件により、

なんとか経営の維持をはかってきたことは周知のことであろう。ひとことで言えば《魚価高騰依存型》、《重装備化》、《自己完結型》の漁業経営といっても過言でなかろう。こうしたいわば高度成長期に一般的傾向であった経営論理と今日の再編成下の漁業経営論理がどのように異なるのか、あるいは断絶があるのかないのかといった視角である。

現在の社会・経済的諸条件は高度成長期とおおいに異なっており、漁業経営の維持・再生産の論理は別なものであろう。このような現段階の《経営論理》の分析も深めていかななくてはならない重要な問題であると思われる。

やや抽象的・観念的なことをとりとめもなく書いたが、以上のようなことを考えているしだいである。

* 学会事務局に、次の文献が寄贈されました。御礼とともに報告します。

文 献 名	(著 者 名)	寄 贈 者	発 行 所
研究報告第18号(南西海区水産研究所)		南西海区水研	同 左
「あま漁業の存立構造」	大喜多 甫文	同 左	人文地理第35巻 第2号抜刷
「最近のわが国における水産地理学の動向」	大喜多 甫文	同 左	人文地理第36巻 第6号抜刷
農学進歩年報第32号	日本学術会誌	同 左	同 左
関西国際空港開設に伴う、和歌山県下における水産物流通への影響とその課題に関する調査研究	和歌山県水産物流通状況調査団	柿本 典昭	和歌山県
東京中央卸売市場における水産物取扱量の動向と社会経済的背景について	添田秀男, 吉原喜好 井上 博, 海野 茂	添田 秀男	日本大学農獣医学部 学術研究報告41号
海と人間第12号	海の博物館	石原 義剛	海の博物館
日韓合同学術調査報告第3輯	日韓漁村社会・経済共同研究会	同 左	同 左
瀬戸大橋の地域経済に与える影響	磯部 作	同 左	経済地理年報第31 巻第2号

第33回漁業経済学会大会報告

学会事務局

5月30日、31日の両日、函館市の北海道大学水産学部において、第33回大会が開催されました。

第1日目、8題の一般報告がなされ、第2日目のシンポジウムは、「200海里体制下の漁業再編－北太平洋を中心にして－」が日程通り実施され、80名余にものぼる多数の参加者のもと、活発な討論が行なわれました。

大会プログラムは次の通りです。

▶一般報告

1. 人工魚礁の経済効果
小樽水産高校 境 一 郎
2. 北海道における底曳網漁業の規模拡大
北海道大学大学院 板 倉 信 明
3. 四日市市におけるパッチ網漁業の存立構造
三重大学 長谷川 健 治
4. 「産業社会」展望と国際的漁業調整の一視点
広島大学 志 村 賢 男
5. 水産物商品化に関する考察
北海道大学 中 居 裕
6. マグロ需要の特徴と価格形成
東海区水産研究所 多 屋 勝 雄
7. 世代別水産物消費の検討
東京水産大学 小 野 征一郎
8. 北太平洋のサケ・マス漁業の動向
日本大学 山 本 忠

▶シンポジウム

テーマ：200海里体制下の漁業再編
－ 北太平洋を中心にして －

1. 200海里体制化以降の国際漁業関係の変容
東京水産大学 長谷川 彰
2. 新海洋法体制下における遠洋漁業資本

の対応

- 日本トロール底魚協会 岩 崎 寿 男
3. 200海里体制下における沖合・沿岸漁業の再編－北海道のばあい－

北海道大学 増 田 洋

4. 水産物貿易の構造と問題点
東京農業大学 堀 口 健 治
5. 総 合 討 論
司会 山 本 忠・池 田 均

▶総会議事(抄録)

議長(境一郎氏)選出、二野瓶徳夫代表理事の挨拶の後、開催校(北海道大学水産学部)を代表して鈴木旭先生の挨拶をいただき、議事に移った。

1. 昭和60年度事業報告
60年度の活動報告、会誌発行、短信発行等
2. 昭和60年度会計報告および承認
決算報告、同監査報告および承認(別掲資料1参照)
3. 昭和61年度予算案の承認(別掲資料2参照)
4. 昭和61年度事業計画案の承認
第34回大会は、昭和62年5月下旬あるいは6月初旬に東京農業大学(東京)において開催する。会誌の発行、シンポジウム・テーマについて(継続か新規も含めて検討)等、諸事業計画が承認された。
5. 学会賞選考委員会報告および学会賞の授与
昭和60年度学会賞

○学会賞 長谷川 彰「漁業管理」恒星社
厚生閣

○奨励賞 加瀬 和俊「沿岸地区漁協の性格と漁家経営」等『漁業経済研究』に多数発表

別掲 1

昭和 6 0 年度決算報告 (昭和 6 0 年 4 月 ~ 6 1 年 3 月)

1. 収入の部

(円)

科 目	予 算	決 算
会 費	1, 100, 000	903, 000
カ ン パ	200, 000	5, 000
会 誌 売 上	20, 000	80, 840
大会関係収入	120, 000	200, 500
寄 付 金	250, 000	450, 000
雑 収 入	60, 000	45, 251
小 計	1, 750, 000	1, 684, 591
前 期 繰 越	1, 141, 142	1, 141, 142
合 計	2, 891, 142	2, 825, 733

2. 支出の部

(円)

科 目	予 算	決 算
会 誌 印 刷 費	1, 300, 000	1, 062, 895
通 信 発 送 費	200, 000	210, 250
事 務 局 費	80, 000	48, 070
会 議 費	80, 000	72, 900
大 会 経 費	200, 000	156, 525
負 担 金	90, 000	82, 300
雑 費	10, 000	14, 450
小 計	1, 960, 000	1, 647, 390
繰 越 金	931, 142	1, 178, 343
合 計	2, 891, 142	2, 825, 733

3. 財産目録

(円)

郵 便 預 金	235, 388
振 替 口 座	153, 740
銀 行 預 金	682, 466
現 金	106, 749
合 計	1, 178, 343

4. 特別会計

(円)

郵 便 預 金	500, 000
---------	----------

別掲 2.

昭和 6 1 年度予算 (昭和 6 1 年 4 月 ~ 6 2 年 3 月)

(円)

会 費	1, 100, 000
カ ン パ	200, 000
会 誌 売 上	20, 000
大会関係収入	120, 000
寄 付 金	350, 000
雑 収 入	50, 000
小 計	1, 840, 000
前 期 繰 越	1, 178, 343
合 計	3, 018, 343

(円)

会 誌 印 刷 費	1, 500, 000
通 信 発 送 費	200, 000
事 務 局 費	50, 000
会 議 費	80, 000
大 会 経 費	200, 000
負 担 金	43, 000
雑 費	10, 000
小 計	2, 083, 000
繰 越 金	935, 343
合 計	3, 018, 343

6. 学会賞選考委員の選出

鈴木旭, 八木庸夫の 2 氏の任期満了に伴ない選考委員の選出が行なわれ, 長谷川彰, 廣吉勝治の 2 氏が新たに選考委員になられた。

7. その他

1. 次期大会 (第 3 4 回大会) の準備

次期大会のシンポジウム・テーマとして, 第 3 3 回大会テーマ「2 0 0 海里体制下の漁業再編」を継続テーマとするか, 新テーマに取り組むかで意見が分かれ, 次期在京理事会 (1 0 月 7 日開催予定) までに, 全国理事に対するアンケートを行って意見聴取することとした。

◎ 在京理事会報告 (7 月 2 2 日)

◎学会誌等の編集・発行について

学会誌の編集および発行予定は、次のようなスケジュールで現在作業を進めています。

- 3 1 巻 1 号 8 月 末 編 集 完 了
2, 3 合 併 号 9 月 末 編 集 完 了
(シンボ特集号)

◎第 3 4 回漁業経済学会大会の開催地

総会議事(抄録)にも書きましたが、昭和 6 2 年の大会開催地は、堀口健治氏、増井好男氏の快諾により、東京農業大学(東京都)になりました。

* 告 知 板 *

国際漁業研究会第2回大会報告

去る 7 月 1 2 日(土)に国際漁業研究会の第 2 回大会が日本大学経済学部で開かれ、つぎのようなテーマでの報告があり、活発な討論がおこなわれた。

1. 東南アジア海域の漁業資源状態と海面漁業の当面する諸問題 (真道 重明)
2. 台湾におけるウナギ養殖業の発展と日本への影響 (増井 好男)
3. 最近の西アフリカ漁業の動向(山本忠)

4. ラスバルマスの漁業基地としての特異性と最近の水産物流通の動向(大津昭一郎)

5. 熱帯汽水域の水産養殖業(大島 襄二)

大会終了後懇親会がおこなわれ、会員相互の親睦がはかられた。なお、昨年度大会の報告集として『国際漁業の研究』(恒星社厚生閣、2,500 円)が出版されている。事務局は東海大学海洋学部に変更した。

(文責:増井好男)

学会誌への投稿のお願い

編 集 委 員 会

学会活動を活性化し、研究水準を高めるために、学会誌に会員各位が活発に投稿されることを、編集委員会としては切望しています。就いては、5 月の全国理事会において、委員会より、理事自身が率先して、2 年に一度は投稿するよ

うにお願いいたしました。是非、学会の状況を推察され、理事各位の御協力を改めてお願いするとともに、理事本人の投稿が事情によって困難な場合には、「代人」をたて、2 年に一度の投稿を励行するようにしていただきたく存じます。

【文献紹介】

NHK 産業科学部編

「証言・日本漁業戦後史」

「第二次世界大戦後における苦難にみちた日本漁業の足跡が、先人たちの証言でようやくまとまった。NHK の献身的努力のたまものであり、日本漁業者に温古知新のための素材として

大いに役立つことであろうと考えている。」と、監修者の浅野長光氏が「監修にあたって」で述べられているように、本書は戦後日本漁業の発展に、第一線で活躍されてきた人たちの証言集である。

<本書の構成>

•第一章 ゼロからの出発

1. そのとき、浜では 宮原 九一
2. 団結する漁業労働者 松尾 繁

3. 組合長は25歳	池尻 文二	•第八章 漁場国際化のなかで	
4. サバ漁再開	宇田川勝治	1. マリアナ海難を語る	小沢富雄他
5. 魚統制の時代	西村健次郎	2. 基地ラスパルマスにて	荒木 茂之
6. 捕鯨再開の前夜	塩見友之助	3. 北転船漁場開発	遠藤 信二
7. 占領下の捕鯨再開	大村 秀雄	4. 広がる合併企業	本田喜三郎
•第二章 制度改革		•第九章 全盛期のマグロ漁業	
1. CHQ水産部	久宗 高	1. 黒潮丸の誕生	浪江 春男
2. 改革への模索	久宗 高	2. 洋上補給船の就航	斎藤 行雄
3. 改革のねらい	久宗 高	3. 近代化する雇用制度	松本 竹治
4. 漁業権証券の考え方	久宗 高	4. すすむ省力化	古谷 清
5. 証券の資金化と漁業協同組合	久宗 高	5. 冷凍技術の発展	小川 豊
•第三章 沿岸漁業の再出発		•第十章 漁場を守る	
1. 広がる漁民運動	関間 久ほか	1. 水俣漁民一揆	石田 好数
2. 全漁連の設立	及川 孝平	2. 臭い魚への怒り	石田 好数
3. 海苔協会の設立	青柳 輝雄	3. 原発を押しもどした町	石田 好数
4. 全漁婦連発足前後	池田 りう	4. 財界主導の公害基本法	石田 好数
5. 沿岸から沖合へ	高橋 泰彦	•第十章 広がるノリ養殖	
•第四章 穀洋漁業の復活		1. 人工採苗と冷凍網	高橋 大
1. マッカーサーラインのもとで	西村健次郎	2. 浮き流しの開発と機械化	高橋 大
2. サケ・マス船団の出発	品田藤次郎	3. すすむ共販体制	高橋 大
3. 生まれかわる以西漁業	渡辺充二郎	4. 六十億枚時代	高橋 大
4. 南方トロール	和田 輝太	•第十二章 変わる漁業環境	
5. マグロ漁船大西洋へ	増田 正一	1. マグロからカツオへ	吉崎 司郎
•第五章 広がる漁業紛争		2. 真珠国際会議	丹下 孚
1. 漁業紛争の背景	高橋 泰彦	3. 軌道に乗るホタテ養殖	三浦 健一
2. 小型底引きの減船	高橋 泰彦	4. 大型化する漁協	黒田 竹弥
3. 越佐海峡事件	高橋 泰彦	•終章 日本漁業の課題	浅野 長光
4. 久六島争奪戦	藤村 弘毅	•日本漁業戦後史/年表	
5. 海の大領設置	藤村 弘毅	•あとがき	門目 省吾
•第六章 すすむ沿岸漁業			
1. 技術交流はじまる	石橋 宗吉		
2. 第一次構造改善事業	森沢 基吉		
3. 浜の改良普及員	下窪 諭		
4. 栽培漁業協会の誕生	本間 昭郎		
•第七章 養殖の時代			
1. 小割式養殖事始	原田 輝雄		
2. クルマエビをつくる	宮村 光武		
3. 広がるカキ漁場	木村 知博		
4. ワカメ養殖本格化	大村 礼司		

B5版, 290頁 1985.3.20

発行所 日本放送出版協会

定価: 2500円

学会短信 No.50

1986.10.

事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

電話 03(471)1251